

2013年度懸賞論文審査報告

－応募論文の講評を兼ねて－



審査委員長 斎藤 峻彦

平成25年度における懸賞「提案・提言」論文には5編の論文の応募があった。応募論文については、6名の審査委員による個別の審査のプロセスを経て、平成25年12月20日に最終審査委員会が開催され、審議を行った結果、最優秀賞および優秀賞の該当作品なしという残念な結果となったものの、「理想的な安全ビデオ」を佳作として選定することとした。以下では今回の応募論文に関する審査のポイントや講評を中心に、審査報告をさせていただきます。

佳作となったこの論文は、航空機内において全乗客に対して提供される緊急時対応の説明ビデオ放送(安全ビデオ)に関する比較評価を行ったユニークな作品である。著者は航空会社が提供する安全ビデオ放送の10社の事例を取り上げ、その品質を、内容の詳しさ、画面の見やすさ(わかりやすさ)、乗客に最後まで見てもらうための工夫(面白さ、ユニークさ)、の3種類の項目を用いて学生23名にアンケートを行い、点数制による評価を行った。評価の結果、1)項目別に細かな説明を行うビデオ、2)映像がシンプルでわかりやすいビデオ、3)ストーリー性をもたせたりキャラクターなどを用いた注目を引くための工夫を凝らしたビデオ、が高い評価を得たこと、また映像における情報が多すぎず、画面の展開が速すぎないこと、字幕をつけるほうが良いことなどが、調査結果から明らかになったと論じた。本研究の主たる目的として、著者は航空利用客の安全確保に関わる情報を的確に提供することの重要性を訴え、その上で上記のアンケート調査結果にもとづき、安全ビデオに対する乗客の注目を喚起するための努力を航空事業者に促している。

この論文は、航空機利用に慣れた乗客が増加するにつれ、ともすれば軽視される傾向のある安全ビデオの重要な機能に着目し、航空各社に対して安全ビデオに対する乗客の注目を喚起するための努力を求めるという結論に到達した。研究の着眼点がユニークであることはもちろん、論文は意欲的な筆致で論述されており、提言の中身のインパクト(説得力)が強い。本論文応募作品の中で審査委員による最も高い評価を得た。

一方、固有名詞の入った事業者間の比較評価を行うこの種の研究には、論文が公表された場合に備えた慎重さ、とくに本研究のような場合は、評価手法・評価基準における客観性・学術性が求められる。論文の公表が、研究対象とされた航空各社の社会的評価に影響

を与えたり、逆に事業者側からの反論を呼ぶ可能性が存在することに配慮することが必要である。今回の研究は、いわば身近な所にいる学生のアンケート調査にもとづくものであり、航空各社の順位づけにあたっての評価・検証については必ずしも十分な客観性や学術性を備えているとは言えないのではないかという感想が多く出された。固有名詞の公表に際して予想される困難のなかには、論文作成上の工夫によってクリアできる性質のものも少なくないので、研究を通じて何を発信したいかに焦点を合わせ、論述に仕方に工夫を凝らすなど努力の余地があるだろう。

今回応募の5作品の中で「理想的な安全ビデオ」が最も高い評価を受けたとはいえ、他の4編の評価との間に大差がついたわけではなかった。そこで、これからの応募者の参考にもなると思われるので、この論文以外の講評も記しておこう。

グループ研究「関西における踏切事故の現状と課題」は審査委員の評価が高かった。近畿地方における踏切事故があまり減少していない状況を踏まえ、改善の余地があると判断した踏切の諸例を観察し、問題点の把握と改善対策への取り組みについて論じた研究である。本作品は、具体的な踏切事例に対する詳細な観察を行い、それぞれについて取り組むべき課題の所在を的確に捉えるなど、調査レポートとしての完成度が高く、資料的価値の高い論文である。調査レポートには多くの写真や関連するデータが掲載され、論理的でわかりやすい説明がなされる。改善策として、連続立体化による踏切除去の抜本的解決策を掲げた上で、それができない場合について、第3種・第4種踏切の統廃合、第1種など危険度の高い踏切における保安係の配置、を提言する。提言がややインパクトに欠けるのは、踏切保安の技術システム改善への言及が少ないこと、および踏切改善策に対する社会的合意の問題に触れられていないためであろう。

グループ研究「航空輸送と関西の空の安全を考える」は、航空事故の実例、事故データ、航空企業の安全度ランキング、バードストライクのデータなど各種資料を用いて航空安全の重要性を論じ、ヒューマンエラーにもとづく航空事故防止の論述に際しては航空管制官やパイロットなど関係者インタビューによって課題の理解や問題点の把握に努めるなど努力が払われている。研究の成果は、EU 地域乗入れ禁止策に準じたチェック体制、バードストライクの抑制策、インシデント情報の積極的活用、管制官の労働条件の改善などの提言となって表れ、説得力が高い。航空安全について詳細な論考が行われる点も本論文の魅力であるが、LCCをはじめ航空企業のコスト削減の最初のターゲットは安全投資であるとする部分には客観的な論拠が求められるし、異論も少なくないだろう。また最後に津波対策の必要を論じる部分は前段の議論とリンクしておらず、唐突な印象を受ける。

グループ研究「世界のバスシステムの改革動向と大阪への提言」は、海外におけるBRTなど新しいバス輸送システムづくりやバス優先通行への取り組みを考察し評価した上で、大阪市の地下鉄延伸計画に関連した4路線(未整備の路線・区間)についてバス代替案—BRT化—を提案し、その中の敷津長吉線に当たる道路区間を選び、果たしてBRTの導入が可能かどうかを実地調査により確認しようとした研究である。同論文は着眼点の良さと提案内容の現実への適用可能性の点で高い評価を得た。残念だったのは、ストーリーの円

滑な流れや論述の推敲に十分な意が尽くされず、荒削りの論文のまま応募したことである。バス輸送の歴史に触れた冒頭の章の中身が後段の議論に効果的にリンクしていないなど、各章間の調整努力も不十分で、折角の着眼の良さが損なわれてしまっている。作品応募の際は、文章の推敲など化粧直しの努力も必要とされるのである。

グループ研究「関西のテーマパークその現状と課題」は、多くの遊園地やテーマパークが閉園される一方、USJやTDLのような大都市立地型の大規模テーマパークが強い集客力をもつに至った娯楽観光サービス産業の構造変化を論じ、USJに焦点を当てた上で、人気や魅力の要因、リスクマネジメントのあり方などを論じる。収集データを用いて同産業の構造変化を分析し、リスクマネジメントの詳細に触れるなど一連の努力は評価に値するが、作品全体は個別の研究の寄せ集め「オムニバス型」に終わっている。グループ研究においては、一人一人が研究結果を持ち寄った場合には、いかなる論文にまとめ上げるかについて十分議論する必要がある。そうすれば、今回のものと同じ資料や草稿の下で、ストーリーづくり、論述の仕方、章節見出しの表現法などに工夫が凝らされ、かなり印象の異なる作品に仕上げることができただろう。

今回、懸賞論文に応募された方々には心から感謝を申し上げるとともに、以上の講評を参考にしていただきながら、平成26年度においてはさらに多くの方々が当懸賞論文に応募されることを期待している。